

寺 報 善 巧

発 行
〒 938 富山県下新川郡
宇奈月町浦山 497
白雪山 善 巧 寺
TEL (0765) 65-0055
FAX (0765) 65-0975

七月十六日〜十九日
永代祠堂会
布教 高務哲量師



☆おときの用意をしています。
ごゆつくりお参りください。

布教 高務哲量師

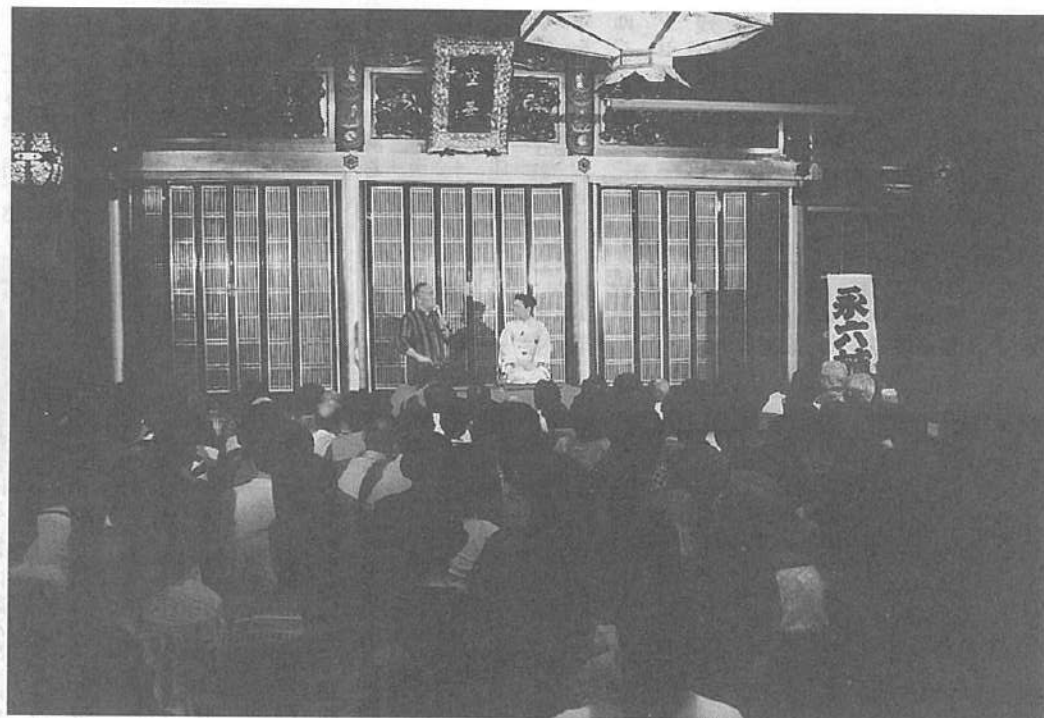
- 一六日 一時 お講・中陣
- 一時 総代会白鶴会物
故者法要
- 一七日 一時 寺族物故者法要
七時半 お初夜
- 一八日 一時 戦没者追弔法要
- 一九日 一時 満座・内陣法名
法要

永代祠堂会

一 日 お講・音沢

寺
ごよみ

七 月



超満員の第17回野休み落語会 6月14日

親鸞聖人は畢生の著「教行信証」を結ぶに当たり、道綽禪師の「安樂集」から御文を引かれます。「前に生まれん者は後を導き、後に生まれん人は前を訪へ、連続無窮にして、願わくは休止せざらしめんと欲す。無辺の生死海をつくさんがためのゆえなり」と。「訪（とぶら）う」とは、現在多く用いられている「叩く」と同じ意味であり、問いたずねること。

前に生まれた人は、後に来る者に、道を教え、導いていつて下さい、そして後に生まれた人は、先人に進むべき道を問いつねていきましょう。そしてその営みがあい統いで、途絶えることのないように。なぜなら、一度きりの掛け替えのない苦悩のいのちを生きたる者どうしなのだからと。

お浄土のお法が、今日の私に伝えられるために、どれほどのいのちの歴史があったのか、ということに思いを馳せましょう。それは私のいのちに連なる祖先の方々は無数のこと、まさに無数ともいふべき有縁の方々のいのちの歴史。

人は、人なるが故のいのちの

祠堂経法要

とぶら
を 訪 へ
さき
前

不安ともいふべき苦悩を引き受けねばなりません。私はどこから来てどこへ行くのか。この私のいのちにどのような意味があるのかと。

幸いにして私たちは、お浄土のあることをお聞かせにあずかりました。必ず仏となるべきいのちを生きたるものであることを知らせていただきました。この

いのちの帰るべき方向と、如来様からそのいのちは掛け替えのないいのちと願われ続けてきたことを、先人は永代に伝えるために、このご本堂を私たちにまでも残して下さいました。

阿弥陀様のご本堂があり、ここで浄土のお経が読まれ、説かれ続ける限り、後に生まれるものも、この苦悩の人生を空しく終えることなく、同じ一つのいのちの世界に帰って行くのでしよう。

永代祠堂経。後に生まれた者として、先人のお心を訪ねつつ、前に生まれた者として後に続く人に、そのいのちは阿弥陀様から願われたいのち、お浄土に帰る尊いいのちですと伝え残してゆく大切なご法縁。

千福寺住職 高務 哲量師



道—ある宗教家のガン体験

雪山隆弘 (サンケイ新聞より)

〈1〉人生の「締め切り」

新聞社には「締め切り」というものがある。Aデスクは締め切りが近づくとなればこの量が増える。一本吸いながら次の一本に火をつける。Bデスクは手洗いに何回となく駆け込む。Cデスクは慌てず騒がず悠々と構えているようだが、足の震えが止まらない。これらを見ていると、デスクの人柄から、生き方までが伝わってくるようで面白い。私は今は富山・宇奈月の山寺の坊さんだが、以前、新聞記者をしていたとき、こんなウオッチングが好きだった。だから、



釈隆弘師 おもかげ

よくわかる。この「締め切り」というものは人間の皮を一枚はぐうで手ごわいものだ。

さて、もうおわかりかと思うが、筆者がなぜこの「締め切り」にこだわるか—それは、このことが、単にマスコミの業界に限らず、われわれの人生にも「締め切り」があるからだ。

ご承知の通り、人間の死亡率は百パーセントである。がんの死亡率、高血圧の死亡率などというが、生まれたものは、必ず、年をとって、病氣して、死んでゆく。生老病死—それも刻一刻とせまっている。散るサクラ、残る桜も、散る桜なのだ。なのに、だれもが、それに気づくことはしない。いや、気づきたくない。だから毎日、ごまかしごまかし生きている。

たまたま、私は二年前、直腸がんという病氣になった。雪道でころんで、尾てい骨を打って、ひびでも入ったかと近くの病院

へ行ったら、骨ではないという。痛みのもとには直腸のポリープだらうという。

いつもニコやかな医師なのだが、顔は笑いながら、目が異様に輝いていた。へこれはただごとではない—と思った私は、帰って「家庭の医学」「からだの本」とむさばるように読んだ。ポリープ。ポリポリジス。かいよう。がん…。松竹梅ではないがランクがある。

風邪を引いても、死ぬんじゃないかと思う私だ。一応、覚悟はした。

そして、一週間、二週間。待った。息をつめて待った。細胞検査でもしたのなら、いかに田舎の病院でも、もう、わかつているはずだ。

「いやあ、まだ何も—でもそのポリープ、一つじゃなくて、六つか七つほどありますんでね。うちで簡単というわけには—紹介状書きますから医科薬科大の方で診てもらった方が—」

うーむ。松か梅か—いや、散るサクラか—そろそろ、私にも、締め切りが近づいたか。その時、四十八歳。かぞえて五十歳。人生五十年とはよくぞいったり。生老病死、起承転結。そろそろ結びだ。締め切りだ。いよいよまともに入る時がきた。そんな

気持ちのノドの奥にぐつとつまった。

〈15〉五十の祝

昨日、私は五十歳の誕生日を迎えた。家族みんなが祝ってくれて、胸一杯だった。

もしかすると、ムリかもしれない—この二月に転移して以来、そんな思いが毎日あったから、なおさらである。

プレゼントはそんなこともあつてか、大物がズバリ。うれしいかぎりだった。

二十二歳になる長女は、東京の宗教系の女子大四年だが、この日かけつけてくれてこんなことをいう。

「お父さん。私、卒業したら、放送関係に就職したいなと思って、そのつもりで色々当たった。結果、わが善巧寺に就職することにする。どうぞ、雇って下さい。開かれた寺をめざしてがんばります。採用通知、早めに頂戴ね」

長男は京都の宗教系高校の二年だが、これも住職の資格を高校でもらえる唯一の学校というので入ってくれて、この夏は、いよいよ「得度」をするという。「二十一日から十日間、みっちり研修受けて、三十日に剃髪

式。八月一日にはツルツル坊さんになって帰るからね。うん、それでいま、親鸞聖人の教行信証の勉強してる。むずかしいね。お父ちゃんへのプレゼントより、専門の辞書送ってよ」

二男は近くの高校一年生。「僕さ、これから、門徒さんの法事に出るようになるよ」

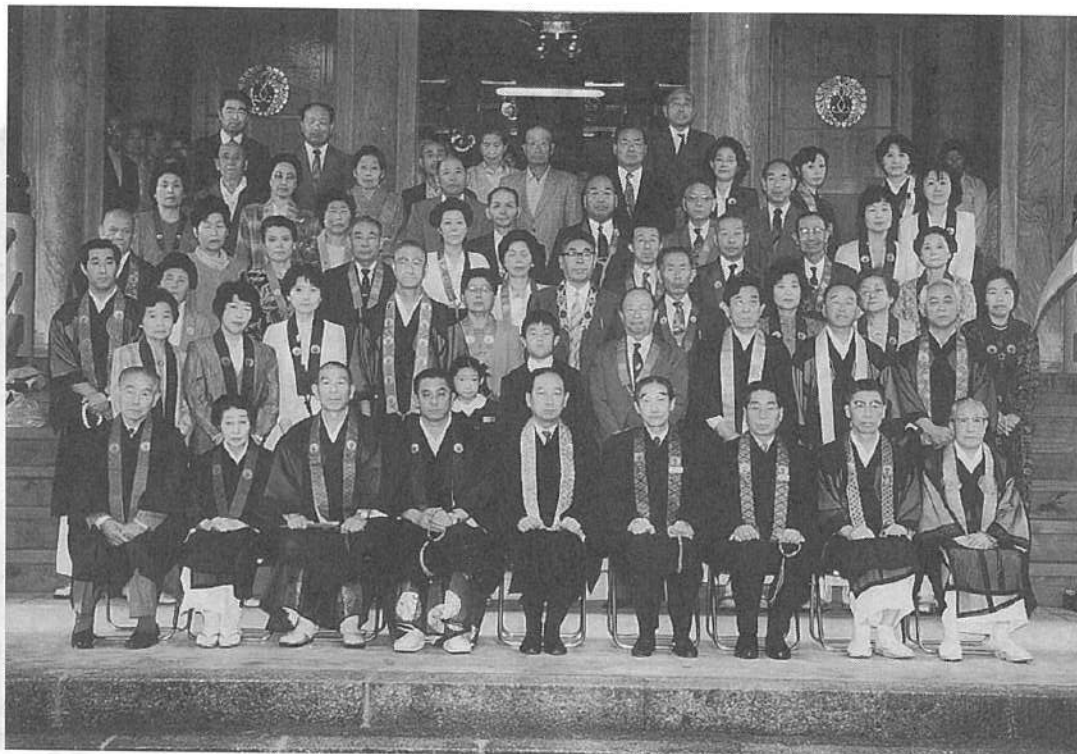
大阪の実家からは「まずはめでたし」と、多額の送金。住職は文人で、ことしも色紙に一句。天翔ける 五十の祝い

つばくらめ
そして妻は「ヒロ、うれしいことばかりね」と涙ぐんで、私の大好物の鰻料理を。

ところで、この、誕生日のプレゼントやら、ケーキやらは西洋からのいただきもの。仏教では一体この日をどのように祝うのか。

お経にはないが、わが宗派では古くから「誕生日には、いのちの尊さを喜び、まず、仏祖に参るべし」とある。つまり、いのちを与えてくれたあらゆるものに感謝して仏壇の前で手を合わせろという。

ウン、そういえばそうだ。この私のいのちは、父と母からもらったものだ。冗談だがあなたは兄弟の何番目だ？三番や四番なら本当に驚いて感謝しなさい。



ご門主さま 黒西組ご巡教

若栗 真照寺へお立ち寄り

6/21

今なら絶対出てこれない番数なのだから。

そんなわけで、私たちは、親代々の命の連続の中で、たまたま人として生を受け、数えきれないものの命をいただいて生かされている。生命の尊重とはこのことをいう。あなたや私が尊いのではない。おかげさまで生かされているから有り難くて尊いのだ。

そう、これはお経にもあった。「恩を知らないものは、傍生なり」。傍生とは何か？体を横にして生きる物。すなわち畜生だ。エゴのかたまりで、おかげを知らぬものは人間ではない。

(25) ブッド・バイ

みんな待っているところへ帰る—そんな気持ちで死を迎えることができたなら、もういうことはない。先日、その待っている人が、また、一人ふえた。私の実父である。大阪の常見寺の前住職で、僧侶の私塾、行信教校の校長をしていた。わが師でもある。

以前から高血圧、糖尿などをやり、八十を超えてかなり弱ってはいた。それでも、仏法広まれの心あつく、全国を講演してまわり、この夏は教校の本講もつとめた。二日前には、戦友と

花の万博へ行き、花をめ、インドネシア館で思い出にひたつたという。そして今朝、気持ちよく風呂に入り「兒子、お前も入れ、ええ風呂じゃ」と母に言っで、着替えてコロンと横になってそのまま、極楽浄土へ往ってしまった。

じいや、ばあや、恩師や、戦友や、またその敵や：みんな一つの輪になって待ってくれている世界へ、父は帰っていった。

じつは、私が再入院したところ「わしより先にあいつがゆくか」と、朝のつとめの本堂で、ポロポロ涙を流したという。これを母から聞いたとき、私もずいぶん親不孝をすることになるのかなあと思ったものである。

それがこの暑い夏、軽いX線治療で、痛みもやわらぎ、なんとか毎日、しのいでいるよ、と便りをしたら「よかったよかった」とよろこんでくれていたという。

いや、本当によかった。おやじより先に往って、愛別離の苦を味わわしめずにすんだ。そしてこんどは、本当に私もゆきやすくなった。じいよりもっと近くに、私の父が待ってくれているのだから、うれしいかぎり。「安心したよ」と母に言ったら「ほんとにそうだねえ」とよろ

こんでくれた。

その父から、私は二年前に入院した時、一度だけ便りを受け取った。むずかしい老僧だから、長い説教でも書いてあるかと思いきや、たった一行「おい、隆弘、人間、生きとる間は、生きとるぞ」とあった。生きている間は生きていゝぞうだ、本当にそうさ。死について、いかに考えようと、生きている間は生きていゝのだ。私の生きる支えとなった。今日一日今日一日、生きていゝ間は生きていゝ、他に何の不足があるう。

そんな私に、妻の玲子は、「ヒロ、逢えてよかったね」といつもいう。これもうれしい言葉である。

約束の枚数は尽きた。ふつうなら、グッドバイだが、グッドはグッド、神がおそばにということだろう。ならば、われら仏教徒、別れは「ブッド・バイ」—仏おそばにまします。たとえ一人になろうとも、仏はあなたと共にある。今日一日、生きていゝ間は生きていゝ。逢えてよかった。ブッド・バイ！

ことは七月十二日、釈隆弘師の誕生日にみんなでお祝いの宴を催す事になりました。

ことしもさいた 花の誕生会 いのちのはな



おめでとうございます
ちいさないのちすこやかに

島田悠希くん

齊 美香子 夫妻

島田正恵ちゃん

川瀬真之介くん
幹 芳美 夫妻

大田公拳くん

岳 敦子 夫妻

西島竜太郎くん

靖 邦子 夫妻

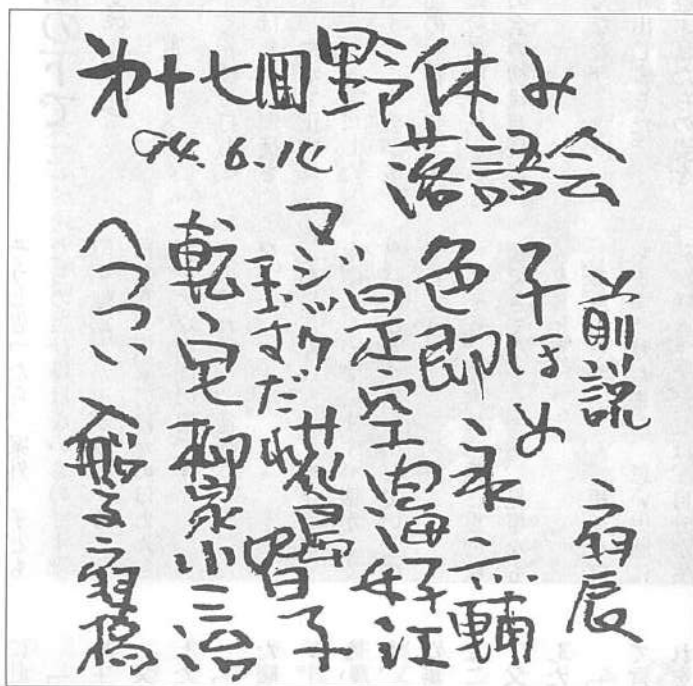
金本志央里ちゃん

正宏 有理 夫妻

仏のこどもたち



六輔七転八倒 野休み落語会 十七回喜



入船亭扇橋さん撮影



八木秀雄さんの盆栽

恒例の「野休み落語会」が六月十四日、善巧寺「お寺座」で開かれました。今年の一番手のお客さまは黒部の老人会で、なんと五時にマイクロバス二台で三十人がご到着。一時間前には二百人を超え、七時十分から二つ目の扇辰さんが本日のご説明をしているうちに本堂は大入満員となりました。開演前からおひざ送りでつめていただくのははじめて以来のこと。七時半きっかりに前座の扇辰さんの「子ほめ」、次いで永六輔さんと内海好江さんの「色即是空」。花鳥皆子さんの流れるような美しいマジックに八十五才の長谷川さんというおじいさんが舞台に上げられて、大いに笑いを誘いました。内海好江、花鳥皆子ご両人の「玉すだれ」のあとは柳家小三治師匠の「転宅」。そしてとりに入船亭扇橋師匠で「へっつい」。中休みには、外の立ち見の方の為に本堂の障子戸をはずすほどの盛況で、満員の観客は阿弥陀様に見守られ心ゆくまで落語を満喫しました。

十七回目にして五百人を突破したことに誰より感激したのは夢を語る会の面々。これまでの苦勞話を後輩に語りながら、涙して喜び合ったことでありました。また来年をお楽しみに。

銀杏の樹の下で(二)

武良竜彦

前号よりつづく

中山さんがすぐ相槌を打ちました。中山さんは熱心な門徒さんで高校の先生。やがて正式に「夢を語る会」として発足した会のメンバーです。この会が後年、雪ん子劇団の両親の会「夢を育てる会」の発足につながり、中山さんはその会の初代会長となった人です。

「ほう、どんな遊び？」

父が身を乗り出しました。

父は境内で遊ぶ私たちの姿を見ながら、お寺が子どもたちや大人も含めた楽しい集いの場となることを、ぼんやりと夢見ていたそうです。だから父は、高島さんと中山さんの話に目を輝かせたのでした。その頃、私は友だちをお寺の境内に誘っていつしよに遊ぶようになっていました。弟の俊隆と教隆も生まれていて、それぞれ二歳と一歳になっていました。

「そりゃあ、やつぱり、いちばんは、かくれんぼ。お寺には隠れるところ、いっぱいあったし。雨の日なんか。ほかに遊ぶ所、なかったもんな」

田舎町といっても、本気で探

そうと思ったら、案外、子どもたちの遊び場はないものです。町を地鉄と県道が縦断するように貫き、民家のほかのほとんどが広大な田園の町です。

「それから、盆踊りやってたな」

高島さんは、遠くを見るような顔になっていきます。懐かしく当時のことを思い出しているのでしょう。

「そう。境内に二重三重の輪ができて、そりゃあ、見事なものじゃった」

またすぐ中山さんが相槌を打ちます。たちまち、思い出話に花が咲きます。父は、自分が生まれ育った大阪府高槻市にある利井常見寺のことを思い出していました。父はその寺の住職の次男として、昭和十五年に生まれたのです。子どもの頃、自分もお寺の境内で遊び回った覚えがあります。お寺の子だといつても、長男ではありませんから、父の後に従ってお坊さんにならなければならぬというわけではありません。しかし、いつかは仏につかえる仕事につくだろう、という、ぼんやりとした予感があったと言います。そして、その通りになったのです。

大阪の常見寺の住職である祖父が、父が僧侶となってこの寺

に赴くとき、こう尋ねました。

「隆弘、おまえは、どういう坊主になるつもりだ」

父は、そのとき、こう応えました。

「お寺を、だれにでも開かれた暖かい触れあいの場所にした。法事のおきしかお寺と縁がないというのはおかしい。いつも、地域のひと共にある、そんな場所になりたい。そして、そんなことのできる坊主になりたい」

父はそんなことを考えていました。

「そんなふうには、昔は昔はつて言っていないで、私たちで、それをやりましょうよ。一つずつ、できることからやっていきましようよ」

父の顔を母がじっと見つめて言いました。

「おー、やろう」

みんなの心が一つになりました。

たちまち、やれることのアイデアの出し合いになり、和室の空気が熱くなっていきます。

それは、境内の銀杏の若葉を揺らす風が、まだ、ひんやりとした冷たさを感じさせる一九七七(昭和五十二)年、初夏のことでした。

やがて、父たちの熱っぽい話

し合いは、お寺で開く「日曜学校」構想として結実しました。校長先生は祖父の住職。月に一度、日曜日に子どもたちを招き、みんなでお勤めをした後、校長先生の法話を聞き、おやつを食べ、いろいろな遊びをして帰るという、心の学校構想で、七月二十四日に、第一回をスタートさせ、門徒さんたちからも好評でした。そして八月十五日、念願の盆踊り大会を実行に移したのでした。この大成功に気をよくした父と「夢を語る会」の人

たちは、このほかに、季節折々の楽しいイベントを企画実行、すべて成功させ、定例化していきました。

秋には、父たちはいただいた新米で、おにぎり大会を実行しました。僧坊にある厨房の大釜で、門徒の女の人たちが総出で

新米を炊き上げ、おにぎりになります。そんな裏方の指揮は母の役目です。

暮れには餅つき大会。正月にはかるた会。小学低学年組は普通のかかるた取りですが、高学年組は本格的な百人一首に挑戦します。春のイベントは、ひとときわ華やかでした。その名も「花の誕生会」。生きとし生けるものすべての誕生を祝う一大パーティです。門徒の中にチューリップ畑を経営している人がいます。四月末の連休前後に、畑のチューリップが満開になり、球根栽培が目的なので、球根を太らせるために花は摘まれ、捨てられてしまいます。それをトラックいっぱい貰い受けてきて、善巧寺の本堂を「花の御堂」にして誕生会をやるとういうアイデアでした。(つづく)



初参式の縁日で
綿がしを手に住職と坊守



血流のせめぎを防ぐ華のむ
ことしまた
熊谷草のかくれ咲く
俊之

俊之



白鶴会・新川桜めぐり ちる桜のこる桜もちるさくら



お経会・花の会 菓子博へ お菓子の味、人生の味 味わいましょう

七時喚鐘。本堂で朝のお参り（正信偈）。寮の講堂でお参り（讃仏偈）。掃除。朝食。九時、講堂で学生法話。そして授業に入る。これが行信教校での毎日の生活だ。

学生法話は年に二回、または一回しか順番がまわってこない。だから本人にしてみれば、かなりの重大事となる。

今日の法話当番は研究生の星野さん。この方の法話を聞くのは二回目である。こんな話をしてくださった。

ある時、校長先生（利井明弘先生）が私にこう言うんです。「あの山本仙骨先生はとても

ありがたい先生やから、腹を立てたことなんてないと思うてるやろ」

「そうですね」

「それがちがうねんで。山本先生も腹立てることはあるねん」

「そうなんですか」

「でもな、後でな、腹立てたことに気付きはねえ」

星野さんはとても

念仏の多い方で、法話に入る時も、何度も何度も念仏がでる。

法話が終わって、私はとなりの同期の石川さんと目が合って、思わず二人で笑い出してしまっ



若院随想

実は去年、星野さんの法話の時、二人で星野さんのことをボロクソに言っていたのだ。

「ナマンダブ、ナマンダブはええから、はよ、御讃題読んで、法話してや」とか、「あの

人何考えて念仏してらんやろ、きつとろくなこと考えてへんで」などなど。

前の自分達を思い出しておもわず笑ってしまったのだ。

私はこの一年で自分がそんなに変わったとは思えないが、この行信教校に来て確実に自分が育てられた、と今思う。変わろうと思って変わるほど私は器用じゃない。そう、まちがいに、私は育てられたのだ。友達に、親に、先生に、仏教に……

そんなことで、今日はとても気分がよく、「若院随想」などといったような題がついた、いつも苦戦している原稿も、サラッと書けた。いつもこんな具合にいくといのだから……

寺
こよみ

八月

- 一日 お講・石田、中新、生地
- 二日 ご助成会 真照寺にて
- 四日 白鶴会ビデオ鑑賞会
- 一三日 青年の集い
- 一四日 盆踊り練習会
- 一五日 こども盆踊り
- 一六日 盆会
- 一七日 十七夜お経会
- 二二日 雪ん子劇団合宿
- 二三日 雪ん子劇団夏の定期公演
- 二七日 雪ん子劇団夏の定期公演

寺
こよみ

九月

- 一五日 雪ん子劇団入善八幡公演
- 一六日 白鶴会ビデオ鑑賞会
- 一七日 釋隆弘師五周年忌祥月命日・十七夜お経会
- ☆九月はお講はありません

お詫びと訂正
前回の寺報「善巧」紙上八頁で、栗虫の前総代川内彦一さんとありましたが、川内貞義さんの誤りでした。ここにお詫びして訂正いたします。
改めて川内貞義さん、ありがとうございます。

永代祠堂会に必ずお参りを

七月十六、十九日

今年も七月十六日から四日

間永代祠堂会がつとります。

お寺を護る門徒の皆さん全員
のご先祖のご法事です。毎日
特別法要がつとりますので、
必ずお参り下さい。

ご講師は福井の千福寺住職
高務哲量師です。

総代会・白鶴会物故者法要

七月十六日午後一時

亡くなられた総代さんのご
家族と現総代さん。白鶴会物
故者のご家族と白鶴会会員は
必ずお参り下さい。

毎日おとぎの用意をしております。ごゆつくりお参り下さい。

清掃奉仕おねがい

七月一日、十月一日

七月の祠堂会、十月の報恩講
は大切な年中行事です。みなさ
まに気持ち良くお参りいただく
為に、清掃奉仕をいたします。
どうぞ協力下さい。

ビデオ鑑賞会へどうぞ

八月四日、九月十六日

善巧寺仏教婦人会・白鶴会では、
六月八日、はじめての試み
としてビデオ鑑賞会を開きまし

寺族物故者法要

七月十七日午後一時

善巧寺、法輪寺、昭行寺の物
故者法要をつとめます。午後
七時半からお初夜があります。
戦没者五十回忌追悼法要

七月十八日午後一時

今年は五十回忌特別法要を
つとめます。是非おまいりく
ださい。

内陣法名法要

七月十九日午後一時

お満座は内陣法名法要をつ
とめます。特別懇志志納者の
内陣焼香があります。

青年の集い 八月十三日夜

成人を祝う会は、今年から八
月十三日に変更、参加者も日校、
雪ん子 O B G 及び門信徒一般に
ワケを広げられます。式典は音
楽法要、集いは会館ホールでパー
ティ形式で行われます。善巧寺
門信徒中学生以上の青年はどな
たでも参加できます。ご近所の
青年をお誘い下さい。

盆会 八月十六日十時

善巧寺では八月十六日午前十
時からお盆のおつとめをしてい
ます。今年は若院の法話もあり
ますので是非おまいり下さい。
昔ながらの習慣で十四日にボツ
ボツとお盆参りされる方がま
だありますが、是非この盆会に
おまいり下さいますように。

雪ん子劇団夏の定期公演

八月二十七日夕

恒例の雪ん子劇団夏の定期公
演は八月二十七日に開催されま
す。今回は金沢の「劇団さくら
んぼ」との合同公演ですので、
二つの劇団のお芝居をお楽しみ
いただけます。ぜひどうぞ。

心の相談はお寺に

苦しい時、つらい時、困って
いる時、悩み事のある時、ど
うぞいつでもおこしください。

第二期連研はじまる

自己の問題を、法に問い、法
を聞き、法を味わういとなみの
中で、念仏者として、全員聞法、
全員伝道をさせていたかどうかと
いう願いのもとに、黒西組連研
が二年前にスタートしました。
その第一期が三月に終了し、
善巧寺では、野島重一、本波秀
夫、佐々木勝武、田中まつ子、
大藪節子さんから五人が無事修了
証と記念腕輪念珠をうけられま
した。二年間おつかれさまでし
た。



第二期は、五月二十八日から
はじまりましたが、次の方々が
受講されます。



谷口登志子さん、谷口恵子さ
ん（魚津）、野島よしえさん、
栃沢みつゑさん（浦山）、以上
四人の方々です。

合 掌

今年も花の誕生会は華やかに
落語会は賑々しく大盛況でした。
遠く広島から、写真だけでも
孫を初参りさせたいとおつしや
る沢田美智江さんのお孫さんの
金本志央理ちゃん。雪ん子 O G
が代理で受式しました。

そして又、昨年は日校 O B の
本波睦君が長男寛崇君と参列し
ましたが、今年は雪ん子 O G の
西島（旧姓橋本）邦子さんが長
男竜太郎君を連れてきてくれま
した。すてきな笑顔の若いママ
は、「参列できて本当によかつた。
二人目も絶対くるからね」と
喜んでくれました。男先生、
もう私達の孫が来てくれるよう
になりましたよ。

音沢の総代、佐々木助一さん
が五月に還浄されました。長男
の助忠さんが「何のことかわか
りませんが、父はいつもお寺の
内陣にいる。会いたかったらお
寺に来いと言うようになりました。」

助一さんは既に生前内陣法名
の手続きもしておられたのです
が、息子さんをお寺に寄せて、
仏法にあつてはしかなかったのだ
すね。念仏の声を子や孫に、助一
さんの最後の教化に心あつくし
たことです。

ご注意！
FAX 番号がかわりました。
FAX 65-10975
TEL 65-10055